埼玉退教だより

第　5　号
発行日　2025／3／15
発行者　石川博　　編集責任者　山田正美
発行元　330-0062　さいたま市浦和区
仲町 3-13-10 ヤギシタビル 4F
e-mail:yamadamasami015@gmail.com

あらためてご冥福をお祈りします

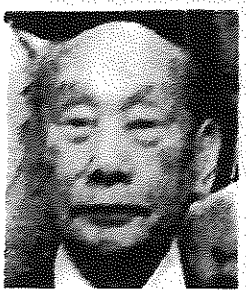
高橋勇さん、沖松信夫さん、長沼清英さん

石川　博（会長）

2020 年の 2 月、「埼玉教組 30 周年のつどい」に出席された高橋先生は初代委員長として挨拶されました。この時の高橋先生は数日前に退院された状態でしたが、参加したいというお気持ちが強かったご様子でした。直後に再入院され、4 月にお亡くなりになりました。埼玉退教の会長在任中で 83 歳でした。この年は新型コロナが世界中に拡大し、日本では全国の学校が国の方針で突然の休校となってしまいました。その後発刊された「高橋勇先生を偲んで」という冊子で前会長の沖松先生は、「…高橋さんの真面目な活動の根底には、平和と民主主義の危機を感じ取り、社会的弱者への政治の冷淡さに対する憤りがあったと思う。」と述べておられます。

高橋勇さん（埼玉教組結成 20 周年）

沖松先生は 1925 年に広島県呉市でお生まれになりました。1945 年 5 月、「隊長要員として熊谷の飛行場へ行け」と言われた時には、特攻隊だとは分からなかったそうです。特攻隊の重爆撃機は 8 人乗りでしたが、800 kg分の爆弾を積むと想定して 4 人だけ乗り、米艦船に見立てた船に体当たりする感覚を訓練していました。8 月 15 日 15 時に出撃する命令が出されましたが、前日の昼食時、延期の知らせを受けました。「玉音放送」で天皇の声を初めて聴き「ああ、これで助かったのだ」と思ったそうです。お亡くなりになる直前に、電話でお話しする機会がありました。「今日、97 歳の運転免許証更新を済ませたので次は 100 歳だ。」と笑っておられました。


沖松信夫さん

長沼さんは沖松先生のことは「オヤジ」と呼んでいました。再建された埼玉高教組の初代書記長を務められたのは長沼さんですが、その当時既に、沖松先生は熊谷高校定時制を退職後、埼玉退教（埼玉教組・埼玉高教組の結成直後にスタート）の会員でした。お二人が組合活動などで一緒に活躍されたのは長沼さんが埼玉の高校で勤務を始められた若いころからで、長沼さんにとって沖松先生はオヤジ的存在だったのでしょう（沖松先生は 1959～62 年に埼高教の中央執行委員長でした）。因みに日本の敗戦時、沖松先生は 20 歳、長沼さんはまだ生まれていませんでした。

私は、長沼さんとたびたびお酒を飲んだ記憶があります。5 年前に高橋会長がお亡くなりになった時は、埼玉退教の総会と 30 周年記念事業のことで事務局長の長沼さんの頭は一杯だったように思いました。またある時は、自分は被爆二世で、被爆者手帳を持っていると話されました。お母さんが長崎で被爆されたとのことでした。長沼さんのお兄さんが結婚した時は、被爆者に対する差別的な偏見でご苦労されたようです。この体験は長沼さんの生き方を決定づけていたのではないでしょうか。「後期高齢者」としての活躍はこれからという年齢で残念です。ご冥福をお祈りします。

長沼清英さん(川越唐人祭り)

地元町長 怒りの告発

元双葉町長井戸川裁判を傍聴して

児玉支部　丸　山　道　雄

２月５日、東京地裁で元双葉町長井戸川さんの最終弁論が行われた。井戸川さんによる国・東電への科学的知見に基づく怒りの責任追及を傍聴した。

元首長が原告の裁判は稀だ。肝心の『３．１１』以降、情報を全く与えられず、疎外されたまま町民と共にベントによって排出された放射能に強襲され、大量に被曝した。国や東電は、誠意も見せずウソの“放出”に、どうにも我慢ならず、怒りに燃えて、訴訟に踏み切った。内情を内部告発し、責任追及を開始し、本年で１０年となった。人間の尊厳にかかわる熱弁に、感動を覚えた。心から敬意を表したい。

この日、稀に見る寒波の中、豪雪の北陸から、東北から多くの傍聴者がかけつけ、傍聴席は満杯になった。以下、数字が示す原発問題に焦点を当て、井戸川さんの訴えを共有したい。

(1)福島第一原発は、“無理に”海面から１０m低く設置した。

(2)津波予測 15.7mと事前に報告があったが、対策をネグレクトした。

(3)被ばく限度を１ミリシーベルト（以下 mSv）から２０mSv に勝手に引き上げた。

(4)チェルノブイリ原発の被曝実態を誰よりも理解している福島県立医大の山下俊一。「１００mSv に達することはないから、心配しすぎなくていい」「放射線の影響はニコニコ笑っている人には来ません。」と放言。事故直後の被ばく者の実態を極力封じ、検査に非協力だった。

(5)甲状腺ガン患者数、子ども３７６人以上が、発症している。小児甲状腺がんは、本来、年に１００万人中１～２人しか発症しない稀な病気である。１８歳以下の福島県民３８万人から、少なくとも３７０人以上の小児甲状腺がん患者が発見された。「数値が高いのは、スクリーニングでの過剰診断の結果だ」と、国連科学委員会（ＵＮＳＣＥＡＲ）を後ろ盾とする東電は、原発事故とは無関係と真っ向から否定した。科学より政治が優先するのか！

(6)自然エネルギーは、原発の半額以下の発電コスト、電力エネルギーの未来を示している。にもかかわらず、再び原発依存に舵を切った。原子力緊急事態宣言は、解除されていないし、核燃料・デブリには手がつかず、廃炉の見通しもないのに！

(7)原発基準地震動について言えば、伊方原発は６５０Ｇ、そして、９９３ガルの耐震設計である美浜原発の再稼働を規制委は承認。昨年の能登半島地震では２８２８ガルだった！経済効率を優先して手抜きをしている。

「ベントしろ！」と言う前に、「双葉に連絡を！」と何故言えなかったのか。町民の被ばくを案じた町長・井戸川さんの無念である。２０mSv 下で福島県民や近県に住む私たちも原子カムラが発するウソ（偽造・隠蔽）や“風評被害”という強迫に晒されている。政党も無関心・無気力、そして電力労連など連合が主導する労働組合も原子カムラに翻弄されている！メデイアの奮闘や一部の市民運動に依存しているだけで良いのだろうか！

この民事裁判は性格上、賠償問題に矮小化される危険性がある。危険なのは原発そのものであり、勝利判決は、被ばく者に寄り添った救済であり、何よりも責任者の謝罪であり自己批判なのである。３．１１は、自然災害というより、人災なのだから。埼玉退教・日退教の仲間とともに、継続して原発問題に向き合って行こうと思う。

支援者に訴える原告の井戸川氏（右）

コロナ禍を乗り越え復活

「ヒューマンフェスタ in こだま」開催

児玉支部　根岸峯生

児玉郡では、行政が教育集会所事業を廃止してしまい、発表の場も交流の場もなくなってしまいました。そこで、児玉郡市解放研を中心にして実行委員会を立ち上げ、この人権フェスティバルを復活させようと協議を重ね、２０１８年2月２４日に第１回「ヒューマンフェスタ in こだま」を本庄市の「はにぽんプラザ」で実施することができました。人権フェスティバルについては「みなくるフェスタ」として、埼玉県全体での各教育集会所活動の様々な取り組みの発表の場として、また、交流の場として県内各地域持ち回りで盛大に開催されており、これまでコロナ惨禍もあり数年休みましたが、今回、第５回が2月１６日に開催することができました。これも地域の皆様のご協力のたまものと感謝しています。私は、退教児玉支部のリコーダーアンサンブルと児玉郡市解放研の朗読劇に参加でき、緊張してミスもしましたがとても満足できたしうれしく、またフェスティバルの参加者がとてもにこやかで、参加してよかったと言ってくれたことがとても良かったです。

地方から国政を動かす

明るい希望の見えたジェンダー平等学習会報告

川村まり子

２０２４年１２月５日　日本教育会館で日本退職教職員協議会ジェンダー平等委員会講演会が朝倉むつ子さんをお招きして開かれた。講演では全国の 349 の地方議会が、国に対して女性差別撤廃条約選択議定書の批准を求める意見書の採択をしていると話された。

富山県・山梨県・長野県などの地方議会で採択に至るまでの道のりが紹介された。議員数の少ない女性議員が会派を越えて協力して意見書採択に臨んだ事例。国会議員は地元の有権者の意見を無視できない。地方議会は顔が見えるので、賛成はしないけれども反対はしないなどの事例。山梨県では 27 自治体のうち８市３町３村で採択された(51.9%)。長野県では 77 市町村と県議会で採択(89.8%)されたと報告された。この講演から地方議会や団体で活躍する女性たちの笑顔と明るい力を感じた。　１９８５年に日本は女性差別撤廃条約に批准をした。しかし権利侵害を救済する「選択議定書」に批准していないため、今でも日本の裁判所は女性差別撤廃条約に照らした判断をしないまま判決を出している。日本女性は権利侵害の被害を受けても個人通報に女性差別撤廃条約を利用できないということになっている。２０２４年6月５日国会に選択議定書批准を求める請願署名１００885 筆が提出された。

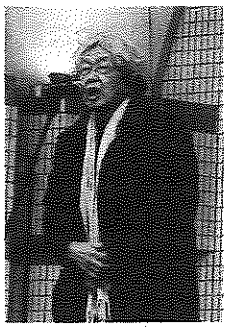
最後に朝倉むつ子さんはこう話された。「日本をジェンダー平等社会にするために女性の権利を国際基準に。個人通報の入り口は狭い。しかし国内の判決が個人通報を通じて国際条約の委員会の審査を受ければ、裁判官も国際条約のレベルを十分に考慮した判決を下し、日本の司法は変わるだろう」と。法が制定されても国は動かない。国が動かなければ、地方から国政を動かす。人権や女性の権利を守ることがあたり前と時代となってきた。私も人権に配慮していないと気づく時は、黙認せず訂正を求める生活にしたいと思っている。

原発事故は終わっていない

3・8 さよなら原発
全国集会

雪の予報もあった3月8日、代々木公園で「さよなら原発全国集会」が開催された。ちょうど3月5日に東電経営陣三名を被告とする刑事訴訟上告棄却があったばかり。あれだけの事故を起こし、あれだけの人々の人生を踏みにじった東京電力の最高幹部たちの責任が問われないという不当判決に対して、集会に参加した人々の怒りも大きかった。集会では全国各地で闘い続ける市民の活動が報告された。「司法は国や東電の側に立っている。東電社長らの刑事訴訟が無罪となる一方で、自主避難者の居住していた公営住宅からの退去判決が出されている」と述べて司法判断を批判した原発事故被害者団体連絡会の大河原さきさん。新潟で柏崎原発再稼働に反対する運動を続けている池田千賀子さんは再稼働の是非を問う住民投票を行うべき、とする住民直接請求を行い、この2月までに15万筆の署名を得た。これを受けて新潟県議会が住民投票条例を制定するかどうかに注目したい。原発事故は首都圏も無縁ではない。新宿御苑に放射能汚染土持ち込みに反対する会は福島原発事故で汚染された除染土を全国にばらまこうとする国の施策を糾弾する。（埼玉では所沢が候補地）反原発の闘いは原発立地自治体だけではない。全国各地で住民運動が展開されている。地道な地元の闘いが反原発の大きな流れにつながるのではないだろうか。

原発事故被害者団体連絡会の大河原さんの訴え


「今までで一番寒い集会でした」と鎌田慧氏

香取、佐原へ…歴史・自然を満喫

児玉支部バス旅行報告

磐上　和美（児玉支部）

10月15日（火）秋空の下、早朝より参加者21名が集まり、児玉支部バス旅行を実施しました。今回の旅行先は香取・佐原方面です。バスの車窓から見える左右の景色…林の木々、畑の作物、高い建物、電波塔、大仏、地域の名産品、過去の災害、街の歴史、そして、道路と付かず離れず見えていた利根川の流れ等など。それぞれの説明をしていただいたおかげで、あっという間に到着しました。また今回の旅行でかつての同僚や同級生や恩師との懐かしい再会が出来たとのこと、さらに皆さんが事前に目的地の下調べをして、見学場所やお土産等の期待を持って参加してくださったこともわかりました。全国に約400社ある香取神社の総本社の香取神宮、歴史的建物が建ち並ぶ小野川沿いの佐原の町並み、伊能忠敬が使用した器具や測量図などの貴重な資料が展示されている記念館へと、予定通り見学することが出来ました。「楽しかったです。」「来年も参加します。」という、温かい言葉と笑顔を頂き解散になりました。

（児玉支部ニュースから一部割愛し転載）

11/10～11
福島学習
の旅

原発事故を語り継ぐ…風化に抗して

～各県退教会員、交流と学習深める～

山田正美（高校支部）

双葉町にかつて掲げられていたパネル

語ることがストレスを強いる

「福島原発事故について話をすること自体、自分にとって大きなストレスとなっています」

昨年１１月１０～１１日に行われた「福島学習の旅」。その一日目の学習会「原発事故からの教訓」で講師となった国分俊樹氏（元福島県教組委員長）はそう述べた。「2011 年から数年は教組の役員でもあり様々な活動、集会を担いましたが、放射能の危険性を主張すればするほど、そこに住んでいる自分たちに精神的負担が重くなってきました。今回の講師もお断りするつもりでした」。

たしかに福島の人々にとって、放射能の危険性を強調することは、自分の地盤を掘り崩すことになってしまう。もう一人の講師、山崎健一氏も「燃料デブリの取り出しが何度も延期され、やっと３グラム取り出した。妻は「これで少し廃炉作業も前進した」と喜んでいる。しかし実際は８８０トンに及ぶ燃料デブリが存在する。私はデブリ取り出しはもやは不可能だと思うが妻には言えない」

終わらない被災

今回の学習会の資料に目を通しても、原発事故の傷はまだまだ深い。燃料デブリ取り出しが不可能だとすれば、アルプス汚染水も永久にたまり続ける。小児甲状腺がんが急増している実態もある。「徐染」も終了したといわれるが、田畑の表層５㎝はぎ取っただけ、山林や池沼は除染しないままだ。これでは避難した住民は戻れない。原発立地の双葉町で人口は 7000 人から 100 人、大熊町で 11000 人が 2200 人へ減少したままだ。

負の遺産

二日目、会場の福島市の県教育会館からバスで双葉町へ。「原子力災害伝承館」見学である。この施設は「原発事故」を「原子力災害」と言い換えることで「不可抗力の自然天災」として捉える欺瞞的な役割を果たしているが、原発被災の実態はある程度学ぶことができる。とくに印象に残ったのは双葉町に2015年まで掲げられていた「原子力明るい未来のエネルギー」の看板の写真パネルである（左写真）。双葉町の大半は「帰還困難地域」だ。国策を信じ地域の発展を信じた結果、自らの故郷に戻れなくなった住民の悔しさをおもう。

現地見学はこの後震災遺構の「請戸小学校」を経て最後に大堀相馬焼窯元付近の見学へ。震災前２０軒以上あった窯元が、いまでは廃墟となって打ち捨てられている。近辺には除染した放射性廃棄物をつめたフレコンバックの黒い袋が山積みに。

原発推進という巨大な国策の前に、私たちは挫けそうである。しかし核廃絶に向けて活動する高校生平和大使の言葉を借りて、「微力だが無力ではない」と信じ、これからも原発事故を語り継ぎ学んでいきたい。「福島学習の旅」は他県退教会員との交流の場としても貴重なので、今後も多くの会員の参加を期待します。

震災遺構請戸小学校で山崎氏の説明を聞く参加者

連載 世界食い倒れ紀行(4) 北朝鮮

＋呑んだくれ

赤上光司(高校支部)

「こんな時にようこそ」

鎌倉孝夫氏を団長とする使節団で、私は北朝鮮に行った。ちょうど、北朝鮮がミサイルを撃ちまくり、小泉首相が渡航自粛を出していた時だ。北朝鮮観光ツアーも全て中止になった。私達は、どこでも「こんな時期にようこそ」と歓迎された。「こんな時期」とは、渡航自粛の時期に、と言う意味である。

空港に着くと、携帯を没収された。私達には、それぞれ見張りの役人が付いた。ホテルに着くと、アントニオ猪木がいて、大きな顔をして、威張っていた。私達はホテルに監禁され、自由に外出出来なかった。

ビールはうまい、でも監禁されたくない

使節団の行くところは、北朝鮮の大工場や進歩的施設ばかり、宣伝してんのかよ！私は、こんなの見たくない、北朝鮮の民衆に直に会いたいのだ。

ホテルの食事は豪勢だった。中華式の回転円卓に、デカイ煮魚、揚物、なんでもあった。ホテルの北朝鮮は、全く貧しくなかった。私はよろこんで、高級料理を頂いたが、脂っぽく、毎日同じなので、最後には、飽きてしまった。

ただし、ビールと焼酎は美味かった。北朝鮮は、自国製のビールと焼酎を作っており、それがハイレベルなのだ。美味いビールが飲み放題、私は満足だ。

北朝鮮に来て、ホテルに監禁されてはいられない。私は北朝鮮の民衆に会いに来たのである。私は、友人と、ホテルを抜け出し、北朝鮮の街を自由に観察した。

スパイ嫌疑で尋問

ピョンヤン駅は改札がないので、中を自由に見て廻った。すると、警官みたいのが来て、私達は逮捕された。私達はスパイだと言うのである。これは、ヤバイ。北朝鮮でスパイは、死刑にされるかも。

ピョンヤン駅は軍事施設だった。軍事施設を写真撮影するのは、スパイ行為なのである。確かに、友人は、写真を撮りまくっていた。

私達は、別室に連れて行かれ、事情聴取された。友好の使節団であることを、必死に訴えると、ホテルに電話してくれた。しばらくすると、私達はスパイから、「友好の友人」になり、ピョンヤン駅を案内までしてくれた。ホテルの私の見張り番が、頑張ってくれたようだ。但し、ホテルに戻ると、見張り番は、カンカンだった。私達が、無断外出したからだ。

北朝鮮の居酒屋を求めて

それくらいで、反省する私ではない。私の目的は、北朝鮮の居酒屋で、北朝鮮の民衆と、イッパイやることである。私は、その夜、再び、ホテルを抜け出し、ひとりで、居酒屋を探した。

スパイ嫌疑もなんのその
"人民"の居酒屋へ

居酒屋はすぐあった。北朝鮮は全て、団地みたいなビルばかりで、その地下に、居酒屋がいっぱいあるのだ。私は、喜んで、居酒屋に入ると、主人に「日本人はダメだ」と断われた。5、6軒、廻っても、全て、断われ、私は泣きそうになった。諦めるか。

ところが7軒目の主人は、ドル札を見せた効果か、OKしてくれた。私は、個室に連れていかれ、ビールがでる。テーブル席には、客がパラパラいて、焼酎を呑んでいる。主人は、人懐っこく私と、一緒にのんだ。言葉は通じ無くても、コミュニケーションは取れた。私は主人と仲良しになった。但し、酒のツマミは、豆しかなかった。ホテルの料理とは、大違いである。

私は、ついに、北朝鮮の民衆と、酒を交わした。目的を達成し、いい気分で、帰ると、見張り番がカンカンで、待っていた。もうバレている。「キョウセイソウカンスルカラネ」と、言われた。強制送還の事。実に、仲良くなったと思った主人が、通報し

たのである。これが北朝鮮だ。通報しなければ、主人の立場も危ないのである。

読売でやり玉になる

こうして私は、豪華なホテルの料理、と、貧しい居酒屋の料理を食べ、北朝鮮の旅を終えた。日本に帰ってびっくり、私の北朝鮮旅行が新聞に載ったのである。読売新聞の記事の見出しは、「高校教師、公費で北朝鮮に行く」と言うものだった。全部、自腹じゃないか。ところが、読売新聞が正しく、私は公費で北朝鮮に行ったのである。「なんだこれ」と、私は思った。なにが公費だよ私は、有給休暇で北朝鮮に行った。と言うことは、私が北朝鮮にいる間も、給料は出ているのである。それが公費なのである。この件を、県議会で、質問した議員まで出たが、私には何のお咎めも無かった。使節団の高校教師と言えば、私のことだ。読売新聞、実名で出しても良かったのに。そしたら、この話を自慢してやるのに。

やりたいことから始めよう

市議会から市民運動、地元の活動へ

坂戸支部　武井誠

４期16年間、埼玉県西部の坂戸市（人口約10万人）で市議会議員をしてきました。昨年４月の選挙で、後継者の小川みなこ市議（42歳、3児の母）にバトンタッチすることができました。彼女をバックアップしつつ、斎藤幸平さんの著書の読書会など、社会の仕組み、地方自治などの学習を続けています。

議員引退を待っていたかのように、地域のいろいろな役員の仕事を頼まれました。現在、地区自治会の副区長（4月からは区長）、地区集会所建設委員会の委員長、老人クラブの会長をしています。今年は民生・児童委員にもなりそうです。それなりに忙しいですが議員ほどではありません。むしろいろいろな人といろいろなことを話す機会が増えた交流の広がりを楽しみつつ、週３回のグラウンドゴルフ、地域のカラオケ大会などにも参加しています。

市民運動としてもいろいろなことに関わっています。「狭山事件を考える入間地区住民の会」「ヒロシマ市民の描いた原爆絵画展坂戸・鶴ヶ島地区実行委員会」、保育・教育や原発、有機農業などをテーマとした映画会上映実行委員会など。特に「狭山事件（１９６３年に起こった女子高校生誘拐殺人事件）」については、犯人とされた石川一雄さんの冤罪を晴らすための再審開始と、袴田事件などの轍を踏まないための「再審法」の改正が、石川一雄さんの年齢、体調を考えても一刻の猶予も許されないことと考え、活動しています。

７０歳を過ぎ、先日、出身高校の「古稀同窓会」に参加しました。鬼籍に入った友人もぽつぽつ増え始めています。確実に減っていく残された時間とやれること。これからは、やらねばならないと思ったことからではなく、やりたいと思ったことからと、優先順位をつけなおしましたが、結果として今までやってきたこととあまり変わりませんでした。ということは、それなりにいい人生を送っているのかなあ、と個人的には思います。

しかし「孫に原発残して死ねるか」という思いはますます強くなっています。そして沖縄の辺野古基地建設、在日外国人への差別、裏金金権政治、選挙をおもちゃにする輩の横行などなど、声をあげずにはいられないことがたくさんあります。何年も前の憲法講演会で、斎藤美奈子さんが「運動を広げるうえで大事なのは①『アウェイ』で、今まで話していなかった人と話すこと、②テクニカルターム（専門用語）を使わず、誰にでも伝わる言葉で話すこと」とおっしゃっていました。なるほどなあ、と感じたことを思い出しています。そして今の私の環境が、まさにそれを実行しやすいところにいると感じています。

長沼さん、さようなら

元埼玉高教組書記長／前埼玉退教事務局長

橋本　正次（高校支部）

桶川高校時代の長沼さん

長沼清英氏が亡くなった。奥様から２月１９日早朝の連絡であった。まさにその前日17日は旧桶川高校職員が毎年１度の楽しい「桶高同窓会」を開いていて、今年は参加できなかった長沼さんの病状を案じていたところであった。

長沼さんとは飲み友達、飲んだくれ友達と言ったところが正直で、彼の偉大な功績を詳しく知り語ることはできない。ただ一つ印象深く忘れられないのは、共産党さんとたもとを分かち現在の埼玉高教組を立ち上げた時である。長沼さんは桶高の現場を離れ、初代書記長として一人で奮闘していた。当時大宮か、浦和か忘れたがビルの道路に面した一角、埼玉高教組の書記局、にわか作りの小部屋で専従書記長一人、パソコンを必死に打っていたのを鮮明に覚えている。高教組の重大な岐路を自覚しての責任からの行動だろう。その後埼玉高教組の運動、戦いは、最も重要な埼玉県の自由で民主的、真っ当な高校教育現場（教職員の生活、教育実践）を作り保障して来たと言えるだろう。

長沼さんは、強烈な個性、行動力を持った人だった。いや強烈過ぎるとの評価も耳にするが、あながちというところか・・彼からよく聞かされたのが「おぼれかけた犬はさらにたたくんだ！」・・・「犬」が何を意味するかここで説明するのははばかれるが・・・「桶高日の丸事件」を記憶されている方もいるかも知れない。その年桶高では職員会議において卒業式に国旗掲揚はしないと決議されたが、当日管理職が掲揚を強行しようとするのに対し、掲揚のためのロープを自身の身体に巻き付けて実力阻止を図った者が出た。それを読売新聞が写真入りでスクープしたものだから・・翌日県教育長が直々に「指導」に桶高にやって来た。それを知った長沼さんと彼に煽られた？私は、校長室から出て来た彼の帰路を実力封鎖！ 暴力は振るってないぞと、胸を張り出し手は後ろに組み、「何しに来たんだ！」と詰め寄った・・・事後の“処分”は、何故かなかった。

長沼さんとの忘れられぬ海外の旅もある。40年程前、フィリピンで最も美しいと言われるビーチの秘島ボラカイ、まだ「地球の歩き方」には載っていなかった。ビーチの砂に足を投げ出して、大きな赤い太陽がゆっくりと水平線に沈み行く壮大な夕景を眺めながら、毎日サンミゲルビールを心行くまで楽しんだものだ。

亡くなってしまうことは、もう会って話したり、一緒に酒を楽しむことができない…ということなのですね。

角甲年功

憎みあう相手と握手をするのは、戦うことより困難だ。和平を求めて敵側に譲歩することは「裏切り」と見なさる▲1981年、イスラエルとの平和条約を結んだエジプトのサダト大統領はイスラム過激派によって暗殺された。1995年、パレスチナ暫定自治に道筋をつけたイスラエルのラビン首相はユダヤ教過激派によって殺害された。敵よりも身内の裏切り者の方が何倍も憎まれるのだ▲反戦・平和を求めるのは苦痛を伴うのだ。和平とは「屈服」「屈従」を強いることであり、反戦とは「卑怯」であり「逃げ」である▲いまウクライナ戦争の終結に向けた交渉が進んでいる。ゼレンスキー＝トランプ会談はいったん決裂したが、停戦をめぐる協議への模索が続く▲今後の交渉の行方を見守るしかないが、「スジをとおしたか」「正義は守られたか」という単純な判断はしたくはない。和平はきれいごとではないからだ。ひょっとしたら、ゼレンスキーの「大義」よりトランプ式の「ディール」が和平をもたらすかもしれない。たとえ汚い妥協といわれても平和の方がずっといい。潔い勇敢な戦争よりも、汚く卑怯な平和を選びたい。（Y）